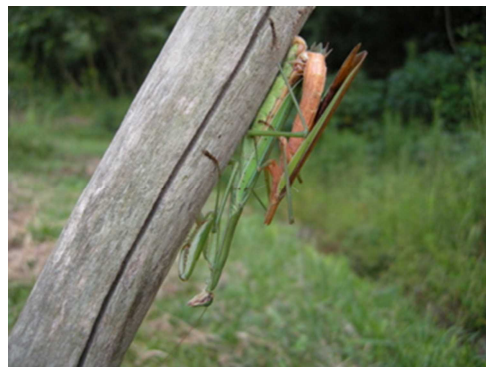


子孫は神様頼み

1. オオカマキリの交尾

カマキリの雌は、雄を食べてしまう怖い存在として知られていますが、本当にそうでしょうか。

カマキリは動体視(動く物体を見る視力)に優れた複眼が非常に発達しています。動くものを餌として認識し、捕獲しますが、動かないものに対しては反応しません。そのため、交尾をしようと近づく雄は餌と認識されてしまいます。そこで雄は「ダルマさんが転んだ！」方式で、雌の後方から気づかれないように少しずつ近寄っていき、跳躍距離内に入ったところを一気に雌の背中に飛び乗って交尾をします。その後、雌の動きを封じることのできなかった雄は、写真のように頭から食べられていくこととなりますが、無事な雄もみられます。



頭部のない雄のカマキリの交尾

一般に、昆虫類は体節ごとに中枢神経(神経節)があり、脊椎動物のように頭部にある脳がすべてを支配しているわけではありません。そのため、雄は頭部を食べられても交尾を続行でき、精子を送り込む目的を達成することができます。交尾する段階で卵はすでに成熟しているため、食べられた雄が卵の栄養として役立つことはありません。雌の餌になっている雄がどのくらいの割合なのか調べてみてはどうでしょう。

2. イヌシデ

シデとは紙垂、すなわち御幣(ごへい)のことです。花穂や果穂が垂れ下がる様子からの命名です。花穂や果穂は、小さな葉が何枚も付いているように見えます。苞(ほう)といいます。葉が変化したものなので秋まで緑色のままです。秋、枯れ葉になった大小2枚の苞で包まれ熟した種子は果穂を離れ、大きい方の苞が翼の役目をして風に乗れ、種子を散布します。

大量の果穂が垂れていますし、その種子の多さから至る所に芽生えが見られます。しかし、光のよく当たる場所であることが必要で、頂上のように下草があまりない、明るい場所が好みです。成長は早いのですが、巨木にはなりません。

成り年があり、大量に花穂を付けた翌年は開花しません。隔年



イヌシデの種子のつき方



イヌシデの果穂



イヌシデの種子と苞

ではなく数年に1回のように、樹によっても異なります。このような成り年はマスティングとよばれており、多くの樹木で見られます。この現象の利点は、子孫を多く残すことができることです。動物が食べきれないほど種子を実らせて生き残る種子を多くする、あるいは、たくさんの花が咲くことでよく受粉が行われ、健全な種子ができるからだといわれています。